

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 関ヶ原合戦における石田三成と毛利輝元

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀越, 祐一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000685">https://doi.org/10.57529/0002000685</a>

## 関ヶ原合戦における石田三成と毛利輝元

堀越 祐一

### はじめに

慶長五年（一六〇〇）九月十五日に発生した関ヶ原合戦は、日本史上でもっとも著名な戦いといっても過言ではなく、それ故に研究の蓄積も豊富である。<sup>①</sup> 慶長三年（一五九八）八月十八日に秀吉は病没し、その前後から政局は大きく変動していくが、まず、秀吉死去直前の同年七月か八月初旬には、徳川家康をはじめとする「五大老」と、石田三成ら「五奉行」が成立し、<sup>②</sup> 豊臣政権は集団指導体制で再出発することになる。

ところで、「五大老」・「五奉行」という呼称は当時用いられておらず、実際には「五大老」は「奉行」と、「五奉行」は「年寄」と呼ばれていたとする見解が出され、大いに注目された。<sup>③</sup> しかし、かつて拙著にて指摘した通り、「奉行」・「年寄」という表現は「豊臣政権護持派」とも言うべき三成らによって使われたもので、家康らこれと対立する勢力は用いていなかった。すなわち三成は、家康ら「五大老」を秀頼に従う「奉行」と、そして自らを豊臣家の宿老たる「年寄」であると位置づけようとしていた。これは、三成らが「五大老」の勢威増大を未然に防ごうとしていたこと

の表れと言える。そしてこの「奉行」・「年寄」表現は、いわゆる「五大老」・「五奉行」成立当初からみられるため、三成らが秀吉死去以前から家康ら「五大老」を警戒していたことになる。

では、三成が「五大老」すべてを警戒対象とみていたかという点、そうではない。これもすでに拙著で指摘した通り、三成が警戒したのは、そのうちの徳川家康ただひとりといってよかった。三成は、他の四人の「大老」とは協調関係を築こうとしていたが、なかでもとくに重視したのが、西日本最大の大名毛利輝元である。

そのことは、秀吉死去からわずか十日後、三成が輝元と密かに起請文を取り交わしていることから窺える。<sup>(5)</sup>これは、実質的に三成と輝元が秘密同盟を締結したものと捉えられているが、その通りであろう。それ以前から両者は友好的な関係にあつたし、<sup>(7)</sup>家康につぐ軍事力を有している輝元を味方に引き入れることができなければ、現実的に家康に対抗するのは困難との判断も当然あつたものと思われる。

その後、家康が諸大名と私的に婚姻を結んだとして、前田利家や三成らが家康を糾弾、両陣営が対立した際には、輝元は利家・三成に与している。さらに慶長四年閏三月に前田利家が病死し、三成がいわゆる「七将」や、これを後押しする家康と対立したときも、輝元は一貫して三成を支援しようとしていた。秘密同盟は確実に機能していたと言えよう。

さて、本稿は、関ヶ原合戦における石田三成と毛利輝元の動向について検討を加えるものだが、輝元は西軍の総大将でありながら積極的な行動はせず、関ヶ原合戦においてほとんどなんの役割も果たさなかつたとかつては考えられていた。だが、近年に至り再検討がなされ、ときに主体的に活動していたことが指摘されている。<sup>(8)</sup>さらに、その存在をより重視し、西軍は石田三成と毛利輝元が中核的存在であり、いわば「石田・毛利連合政権」とも言うべきものであつたとの説も提示されるなど、<sup>(9)</sup>かつての通説は見直されつつある。名目上の総大将である毛利輝元と、事実上の総大将として指導的立場にあつたとされる石田三成については、その動向や描いていた戦略など、さらなる研究の

進展が期待されよう。合戦そのものはもちろんだが、秀吉死去から合戦に至る過程において、石田三成や毛利輝元がどのような政治的あるいは戦略的判断をし、行動に移したのか。<sup>10</sup> 本稿では、このような問題関心のもとに、両者の動向について考察を加えたい。

### 一 浅野家に残った真田宛三成書状

美濃国関ヶ原で発生した決戦において、三成方西軍が家康方東軍に敗れたことはあまりにも有名である。では、なぜ三成は敗北したのか。小早川秀秋の裏切りや吉川広家の内応といった西軍内部の不統一や、各方面に軍勢を分散する戦略上のミスなどは、よく指摘される。しかし、それ以外にも原因はありそうに思える。そこで、合戦前における三成の考えを詳細に伝える史料を検討してみたい。八月十日に三成が信濃国上田城の真田昌幸・信繁父子に送った書状がそれである。<sup>11</sup> 長文ではあるが、ここに全文を引用する。

① 去五日之御状、今日於濃州大垣令拜見候、

一 度々爰元之様子・其地之儀申越候、未無参着候哉、只今の御書中、無御心元候事、

一 羽久太儀、何様ニも 秀頼様次第と度々到来候間、羽柴肥前老母并家老之人質江戸へ遣取、未御事請不申、

一 剩加州小松表へ人数を出など、風説候条、急度越中へ乱入可在之旨、度々申遣候、定而早々彼表へ可及行候事、

一 石玄番事ハ、大坂ニ妻子其上兄弟在之事候間、致推量ニ、公儀慮外難成身上候間、石備前を以巨細申候キ、

一 定而別条在之間敷候歎難計事、

一 羽右近事、定而菟角二内府儀無二三可存候、新知拜領候、其上上方ニ妻子一人ならて無之、菟角貴所方早々

可被及御行事、

〔森忠政〕

〔徳川家徳〕

〔石川三長〕

〔石川貞清〕

⑤

一 石玄事も、済候へハ能候、不済候ハ、是又其方（毛利）可被及御行候、越後（子）之道明候へハ、会津へ之通用共ニ自由候事、

一 信州之儀ハ不及申、甲州迄も貴所御仕置可在之旨、輝元をはしめ各被申候事候、拙（子）方（毛利）能く申し候へとの事、

此段先書ニ申候、早々人をも御抱候て、方々へ之御仕置此時候、拙子儀しかと濃州ニ在陣候、（長井某）長大勢州ニ在

陣候、此口之儀、家康ほともの者十人上り候共可御心安候、討果候（長）外他事不可在候、今度関東へ罷立めんく、

尾三州之間ニ集居候て、懇望申族も候、又江戸にて人質をしめられ、致迷惑族も在之時候、味方説ニ申候哉ら

ん、家康急度上ルなど、申成候由候、あわれ上り候へかしと念願迄候事、

一 菟角早々会津へ使者を被立、公儀無御如在、拙者と被仰談候由、可被仰合候、国ならひにて物のそかどを

申方（三）候間、如此御入魂之上ハ、少々出入ハいらぬ事候間、物やわからかに、彼方氣ニ入候様ニ被仰越、御入

眼此時候事、

一 先書にも如申、臥見之城、家康留守居鳥居彦右衛門（元忠）をはしめ、七頭敷千八百余残置候処、此時宜候間、関

東へ明退候へと申候へ共、りくつ申候間、去朔日四方（元忠）乗入、一人も不残討果候、鳥彦右首ハ御鉄炮頭鈴木

孫三郎（重朝）討捕候、此間、御殿中雜人はらふみけがし候間、不残焼払候、大垣（繁）之儀も、西之丸ニ人数五六百ほと

残置候を追出、臥見へ追入、輝元被入替候、是又臥見にて同前ニ討果候、臥見にて各手を碎、乘崩候、九州な

との衆別而手柄を被仕候、大坂ニハ増（増長盛）右被居候、輝元在城候、臥見ニも六七千にて掃除普請以下申付候、然間、

京都大坂静二候、勢州江安（忠規）国寺・吉川壺万余召連、長大同道にて罷越候、尾濃へハ拙子罷越候、（義弘）鳥津其外九州

衆佐和山へ被参候、人数入次第、尾濃之間へ可打出候、丹後之事はや一円平均ニ申付候、（編川）幽斎事可被成敗ニ義

定候処、自 叡慮色々被 仰出、命之事相助、九州中流罪之休候、則諸方へ之備書立進入候、此備書立之内ニ

在之面々□、無二 秀頼様可抽忠節覚悟候、せいしニまで相究候、此外先手ニ在之衆、此書立ニ不乗衆も可在  
 之候、右之段、先書ニ雖申候、不相届候哉、又申入候、恐々謹言、

(慶長五年)  
 八月十日

石治少

三成(花押)

真田安房守殿

同左衛門尉殿

御報

この書状には、きわめて興味深い内容が多く含まれている。以下、ここから判明することを指摘し、三成の考えを  
 読み解いていく。

まず、情報伝達ルートの確保という点において、西軍は著しく苦境に立たされていたことがわかる。これは、棒線  
 部②「度々爰元之様子其地之儀申越候、未無參着候哉、只今の御書中、無御心元候事」という記述からみてとれる。  
 棒線部①から自明なように、真田からも三成へ、八月五日付けで書状が出されており、それを三成は五日後の十日、  
 美濃の大垣にて受けとっている。その書状のなかで真田は、上方の情勢や、自身が今後どのように行動すべきかを三  
 成に尋ねたのであろう。それらについて記した書状はすでに何度も出したはずなのに、それが届いていなかったこと  
 を知った三成が戸惑っている様子が窺える。

では「爰元之様子・其地之儀」を書き記した三成の書状は、どこへいつてしまったのか。書状が「度々」出されて  
 いる点を踏まえれば、単に到着が遅れているということとはありえない。

大きな手掛かりとなるのは、この三成書状が『浅野家文書』として伝わっている点であろう。三成と同じく「五奉行」

の一人であった浅野長政とその嫡男幸長は東軍に属したが、この浅野父子は甲斐一国を領有していた<sup>13</sup>。その浅野家に伝来した文書群のなかに、この真田父子宛三成書状が含まれている理由は、ひとつしかありえない。西軍に属した信濃国上田の真田あるいは会津の上杉景勝に対して、西軍首脳部から使者が派遣されることを予期した浅野が、その使者を捕らえるべく隣国信濃にまで警戒網を張り巡らし、首尾よく書状を奪い取ったと考えるのが妥当だろう<sup>14</sup>。先に述べたように、真田に届いた書状もあるので、すべてが奪われていたわけではないものの、中山道を押さえる有力な味方である真田との情報の疎通が、著しく阻害されていたことは間違いなく、これは三成にとって大きな痛手であったはずである。もちろん、西軍の機密が東軍に漏洩してしまっているという点も見過ぎすことはできない。

弊害はそれだけではない。棒線部<sup>15</sup>に「菟角早々会津へ使者を被立、公儀無御如在、拙者と被仰談候由、可被仰合候」と、また八月五日付の三成書状には「此飛脚早々ぬ<sup>沼田</sup>また越ニ会津へ御通候て可給候、自然ぬまた・会津之間ニ他領候て、六かしき儀在之候共、人数立候て成共、そくさいに成共、御馳走候て御通しあるへく候事」、「会津へも早々関東表へ御行被仰談、行ニ可被及之由申遣候、貴殿よりも御入魂候て、可被仰遣候事」とあることからわかるように、三成は会津の上杉への連絡を真田に依存していた。真田と十分に意思の疎通ができていないということは、上杉に対してと同様、いや、それ以上に疎通を欠いていたということになる。ましてや、三成は上野国沼田を経て会津へ使者を通すように頼んでいるが、その沼田城主である真田信幸は父弟と袂を分かち東軍に属してしまっている。これは、上杉への連絡がさらに困難になったことを意味しており、三成にとつて大きな誤算だったに違いない<sup>16</sup>。要するに三成は、美濃から信濃、さらには遠く会津まで続く情報伝達ルートを遮断され、真田・上杉という、東国における数少ない重要な味方と連絡をとることに困窮していたのである。

ところでこの事実は、従前から存在する三成・上杉の事前共謀説の有無とも密接に関係するものと思われる。事前

共謀説とは、上杉と三成はかねてから気脈を通じており、上杉が家康を挑発し討伐軍の出征を誘引し、手薄となった上方で三成が家康打倒の兵を挙げるといふ、かねてからの密約があったとするものである。しかし三成は、ここで上杉としきりに連絡をとろうとしている。事前に入念な談合がなされているならば、この時点での上杉との交渉はさほどの重要性が感じられないし、なにより三成が上杉に求めている①公儀を蔑ろにせず、三成と相談して行動してほしい、②家康領の関東へ軍事行動に出てほしい、という二点は、ごく自然なものであり、事前の談合が十分に行われているならば、改めてここで要請するような筋合いのものとは思えない。それに、上杉討伐軍が組織されたとしても、家康が自ら出陣するとは断定できない。圧倒的な戦力差があり、勝利は疑いないと家康が判断すれば、江戸に在する嫡男秀忠を総大将とし、自身は大坂にとどまるという選択をする可能性も否定できない。家康が大坂城を出なければ、三成は秀頼を擁立することはできず、拳兵が成り立たないのは明らかである。これらのことを考慮すると、事前共謀説といったものはなかったと考えるべきであろう。

さて、情報伝達の経路が遮断されていたのは、なにも中山道だけではない。北国に目を向けると、棒線部④「老母并家老之人質江戸へ遣取、未御事請不申、刺加州小松表へ人数を出など、風説」があった加賀や越中を領する前田利長は完全に東軍方であったし、「何様二も 秀頼様次第」(棒線部③)と書き送ってきたため三成が樂觀視していた越後の堀秀治も、結局は家康に味方している。遠回りの経路ではあるが、北陸道ルートも事実上ふさがれていた。

東国の様子すなわち家康の動向を知るうえで最も大事なのは東海道ルートであることは間違いない。しかし、このルートこそ東軍の牙城とも言うべきもので、尾張以東の諸大名はすべて東軍に加わっており、ここを通り抜けて江戸の家康の挙動をうかがうのは困難を極めたことは容易に想像できよう。

こうしてみると、中山道・北陸道・東海道のすべての経路が東軍に抑えられていたという事実が浮かびあがる。西軍

方が東軍の出方を事前に察知するのはほぼ不可能であり、当然ながら家康の出陣も知りようがなかった。家康率いる数万の軍勢が大挙して東海道を西上するとして、諜報活動が成功すれば、必ず三成らの耳に入るはずである。しかし、西軍方にはそれに備えたような形跡は見当たらない。三成は「家康ほともの者十人上り候共可御心安候、討果候方外他事不可在候」(棒線部⑫)とか「家康急度上ルなど、申成候由候、あわれ上り候へかしと念願迄候事」(棒線部⑬)などと、家康西上の可能性について触れてはいるが、あまりに樂觀的であり「ただし、これが三成の本心であったとは断定できないが」三成としては、家康は少なくとも当面は江戸にとどまると考えていたのではなからうか。いずれにせよ、東軍方は徹底した情報封鎖を行い、西軍方の諜報活動を未然に防いだと考えられ、これが家康の隠密行動を可能にした。家康の西上が確実なものと考えていたならば、三成としても、諸方の味方を集結させるなり、大坂の毛利輝元に出陣を要請するなり、もつと打つ手はあったかもしれない。だが家康の動向がまったくわからず、そのうえ会津の上杉の存在が家康の行動を掣肘することを期待しすぎたのか、これを現実的なものと捉えていなかったようにも見受けられる。当の上杉とはいえ、東軍方の伊達・最上との戦闘に専念しており、三成が望むような関東へ乱入する余力はなかったはずだが、上杉との密なる連絡ができていない三成には、そのようなことは知る由もなかったのだらう。

情報伝達の点において、さらに指摘できるとすれば、三成の「うかつさ」である。真田父子に宛てたこの書状は、一見してわかるようにかなりの長文である。これに比例して、紙も当然大きくなってしまふ。使者が書状をどのように隠し持っていたかは不明だが、関所などを通過する際に、露見しないようにするのは極めて難しかったであろう。だからこそ書状は奪われたのである。

一方、家康はどうであったか。

從吉川殿之書状、具令披見候、御断之段、一々令得其意候、輝元(毛利)如兄弟申合候間、不審存候処、無御存知儀共之

由承、致満足候、此節候之間、能様被仰遣尤候、恐々謹言、

(慶長五年)  
八月八日

家康(花押)

黒田甲斐守殿  
(長政)

これは、先陣をつとめる味方の大名のひとりである黒田長政に宛てたものである<sup>(15)</sup>。西軍に属している毛利一族の吉川広家からの書状を読み、広家の言い分を承知したこと、毛利輝元とはかつて兄弟の如く接することを約束したにもかかわらず、今回輝元が西軍の総大将となったことを不審に思っていたが、輝元はこの件について関知していないことを聞いて満足した、と述べている。吉川広家が黒田長政を通じて家康に接近したことを示す史料だが、この家康書状は吉川家に伝来しているから、黒田を介して吉川広家へと送られたことは疑いない。ではこの書状は、どのようにして吉川広家のもとへもたらされたのか。まずは家康から黒田へ送られたに違いないが、その道中は東海道筋の東軍勢力範囲のみを通っていくことになるので、なんら問題はなかるう。だが、黒田から吉川へとなると、状況はまったく異なってくる。形だけとはいえ西軍に加わっている吉川広家へ無事に届けるためには、他の西軍大名の陣近くも通過しなくてはならないはずで、そこで万が一にもこの書状が彼らの手に渡ってしまったら、吉川広家の身に危険が及ぶだけでなく、東軍勝利への見通しも立たなくなってしまうだろう。当然、相応の対策が必要となる。

それを教えてくれるのが、この書状に添えられた押紙である。そこには、

此 御内書、使者関所を通候付而、帯之内江縫込取帰候二付、にしみ有之候故、後年ニ至洗候而損申候、使者服部治兵衛、

と記されている。黒田の家臣が使者となって家康書状を携えていくのは、あまりにも危険が大きすぎる。吉川の陣所へ迷わずに到達できるのは、やはり吉川の家臣であるはずで、使者の服部治兵衛という人物は、黒田ではなく吉川の

家臣と考えるのが自然であろう。服部がひそかに黒田の陣所へ赴いて吉川の書状を渡し、これを江戸の家康のもとへ送り、返書が届くまでの数日間を黒田陣にて過ごし、やがて届いた家康の返書を受け取って、吉川の陣へと帰っていく。その際、西軍方の諸大名が設置した関所を通過せねばならないが、そこで服部は、吉川家臣とは名乗れなかつたであろう。なぜ東軍の勢力範囲から吉川の家臣がやってきたのか―そのように不審がられるのは明らかだからである。身なりや名前など様々に工夫をこらし、そして何より重要な家康書状は帯のなかに縫い込んで、ようやく吉川広家のもとへ戻ってきたに違いない。家康の書状がごく短文なものも、そのような事態を想定していたためと考えれば納得できよう。

伝えたい事柄をすべて書こうとしたであろう三成と、要点のみ書き記した家康。三成の書状は途中で奪われ、西軍内の諸事情が筒抜けになったのに対し、かたや家康の書状は無事に届き、吉川の内応を確実なものとした。書状ひとつとってみても、両者の気配りには大きな差があったと言えるだろう。

## 二 諸大名の去就に対する三成の認識

さて、この他にもいくつかわかることがある。たとえば、各地の諸大名たちの去就についての三成の私見がそうである。先述したように、越後の堀秀治は味方になると確信し、また、信濃国松本城主の石川三長（康長）も「大坂ニ妻子其上兄弟在之」（棒線部⑤）うえに、「公儀慮外難成身上」（棒線部⑥）であるため、こちら側につくと見込んでいる。「公儀慮外難成身上」というのは、かつて三長が父の石川数正とともに家康のもとを出奔して秀吉に仕えたことを言っているであろう。窮乏を救ってくれた秀吉に恩義を感じているに違いなく、その遺児である秀頼のためには懸命に働くべき立場にあるはずだ、というわけである。だが、その観測ははずれ、両人ともに東軍に参加することになる。

その一方で、「老母并家老之人質江戸へ遣取、未御事請不申、剩加州小松表へ人数を出など、風説」(棒線部④)がある前田利長と、家康から「新知拜領」(棒線部⑦)を受けた森忠政は東軍につくと予測しており、この両者に関する三成の見立ては間違っただけではなかった。だが、堀は越後から前田領越中を牽制しうる、立地上重要な大名であり、石川も兄弟合わせて十萬石を領し、信濃国内では森忠政につぐ勢力を有して、同国では真田以外に有力な味方もたない西軍にとって、その動向は無視できないものがあつたろう。石川の西軍参加については三成も確信はしていなかったが、それを差し引いても三成の情勢判断が、的確だったとはいえないだろう。

さらに、棒線部⑬に「今度関東へ罷立めん、尾三州之間ニ集居候て、懇望申族も候、又江戸にて人質をしめられ、致迷惑族も在之事候、味方説ニ申候哉らん」とあるように、先陣として来ている東軍方諸将についても、彼らは必ずしも率先して家康に味方しているのではなく、こちらに「懇望」してきている者もいる、勧誘することも可能だとしている。このような「懇望」が実際にあつたのかは不明だが、西軍は内通や内応が多く発生し内部分裂をきたしていたのに対して、東軍は一枚岩であつたという従来の想定をくつがえす可能性を示唆しており、注目に値する。

また、真田に対する過度な期待も書状から読み取れる。東軍加担が確実な森忠政に対しては「貴所方早々可被及御行」(棒線部⑧)とし、去就が曖昧な石川三長についても、もし敵方となつた場合には「是又其方方可被及御行」(棒線部⑨)としている。森・石川ともに石高面で真田を上回っており、わずか数万石の大名に過ぎない真田が独力で対処するのは難しいはずである。その解決策として、三成は「早々人をも御抱」(棒線部⑩)することを提案しているが、短期間のうちに新しく家臣を召し抱え、軍を編成できるとは到底考えられない。<sup>(20)</sup> 実際には、徳川秀忠率いる大軍が攻め寄せたために真田は居城の上田で籠城することになり、三成が期待した真田による「方々へ之御仕置」(棒線部⑪)は実現しなかったが、仮に秀忠軍の襲来がなかったとしても、実行は難しかったであろう。<sup>(21)</sup>

三成が意外にも様々な事情に通じていたことも指摘しておきたい。慶長四年（一五九九）閏三月、三成は失脚し、居城の近江佐和山にて隠居することとなる。翌五年七月に挙兵し、大坂への入城に成功して復権するまでの間、中央の政治からは遠ざかっていたはずだが、三成はその間に起きたことを正確に把握している。

まずは前田利長の生母が、江戸で人質とされている点。これは慶長四年秋、前田利長が秀頼への謀叛や家康暗殺を企てたとして糾弾され、ついに家康に屈し、生母を人質として差し出したものである。ところがその人質は、大坂ではなく家康の本拠地である江戸へと送られた。大名間で個人的な人質のやり取りをするというのは通常ありえない行動であり、これを行なったということは、この時点で家康が豊臣「公儀」そのものを体現していたと言つてよい。さらに、家康がすでに政権奪取の野心を隠そうとすらしなくなったことを示す衝撃的な出来事とも言えるが、それゆえに諸大名の間にもこの情報はいち早く伝わった可能性は高い。ただし、三成が隠居したとはいえ、大名石田家はいまだ健在であつたから、三成がこのことを知つていても不思議ではない。

しかし、森忠政の「新知拝領」については、かなり事情は異なる。天正十七年（一五八九）十一月、森は秀吉から美濃国において七万石を与えられた。<sup>(22)</sup>ところが慶長五年二月一日には、家康により信濃国川中島十三万七千五百石へと加増・移封されている。<sup>(23)</sup>三成の言う「新知拝領」が、この川中島移封を指していることは明らかで、これが森を「定而菟角ニ内府儀無二」（信川系棒線部⑦）とさせたとしている。この「新知拝領」は、なにも秘密裡に行われたわけではないだろうが、かといつて、当事者と豊臣蔵入地を管理する「三奉行」以外に、広く知れ渡るようなことも思われない。となると、可能性としては①政権復帰後に「三奉行」から知らされた、②佐和山にいなながらも中央の情報を密かに入手していた、このどちらかであろう。①であるならば、復帰後の三成へ「三奉行」が詳細な情報を提供していたことを示すことになり、三成に対する「三奉行」の積極的支持を示し、②ならば、居城に閉居しつつも三成がなお

も中央の情勢への関心を失わず、復権の機会を狙っていたことを示す。どちらかはわからないものの、いずれにせよ興味深い事例と言える。

### おわりに

以上、合戦直前における三成の思考を、真田に宛てた書状から分析を試みたが、それでは毛利輝元についてはどうであったのか。一族の吉川広家の内通によって毛利家は合戦に参加せずに終わった。輝元自身は大坂にとどまり、関ヶ原敗戦後は東軍方との交渉に応じ、大坂城を退去している。戦意が旺盛だったとは言えない行動だが、主力決戦に敗北した直後という状況を考慮すれば、やむを得ないのかもしれない。三成と秘密同盟を結んで以降、輝元は三成失脚まで一貫してこれを擁護していた。失脚後は家康との関係修復へと傾いていくものの、輝元の基本路線が三成との関係強化であったことはたしかであろう。

### 註

- (1) 関ヶ原合戦研究についての研究動向や現状については、谷口央「関ヶ原合戦の位置づけと課題」(谷口央編『関ヶ原合戦の深層』所収、高志書院、二〇一四年)に詳しい。
- (2) 桑田忠親「豊臣氏の五奉行制度に関する考察」(『史学雑誌』四十六卷九号、一九三五年)。
- (3) 阿部勝則「豊臣期五大老・五奉行についての一考察」(『史苑』四十九卷二号、一九八六年)。
- (4) 『豊臣政権の権力構造』(吉川弘文館、二〇一六年)。
- (5) 『毛利家文書』九六二号。
- (6) 光成準治前掲書。

- (7) 今井林太郎『石田三成』（吉川弘文館、一九六一年）など。
- (8) 光成準治『関ヶ原前夜 西軍大名の戦い』（日本放送出版協会、二〇〇九年）。
- (9) 白峰旬「慶長5年7月〜同年9月における石田・毛利連合政権の形成について」（『別府大学紀要』五十二号、二〇一一年）、同「豊臣公儀としての石田・毛利連合政権」（『史学論叢』四十六号、二〇一六年）など。
- (10) 合戦以前、とくに三成が失脚する直前の輝元の動向については、光成準治氏らによってかなり明らかにされてきている。ここでは素材として、同族の毛利元康に宛てた輝元の自筆書状が用いられているが（『厚狭毛利家文書』『山口県史』史料編中世3）、國學院大學図書館が所蔵する「毛利輝元自筆書状」も、この時期の輝元に関する貴重な史料である。以前、拙稿において紹介を試みたことがあったが（『國學院大學図書館所蔵の毛利関係文書』『校史・学術資産研究』五号、二〇一三年）、そこで翻刻を割愛した史料についてここで改めて提示しておきたい。

【史料A】

昨日ハ頓着候、秀就も今日ハとく可着候、其方肝煎尽心候、

一 秀就ハ不申付候へとも、少之儀ハ仕候様候、一日も不被居事候、さいく<sup>二</sup>仕候板とすミぬり家へい・はしら・ふる

木など入候、竹ハ此土居切候て不苦所あまた候、さらせ候過分竹も是にて可成候、そきなどハ有間敷候哉、

一 茶湯道具・屏風・た、ミ差上せ候之由候間、待人候、暮・せうきも可差上せ候、かしく、

右近

【史料B】

定而今日ハ秀就可罷上候、待入候、めい〜書中あげ申候、返事可仕候、

とかく今之分にてハ、何にと存候、□□仕まいならず候、ふる板とも、とく早々□□可差上せ候、ふるわけハなく候哉、

た、ミあたらしきもきと可差上せ候、其元おさへのた、ミ□□た、ミとも<sup>三</sup>井伊兵へ不参候ハ、<sup>（井伊直政）</sup>福越<sup>三</sup>申候て、上や

しきあかられ候ハ、可差上せ候、為心得候、かしく、

右近

## 【史料C】

下へ之状、此者遣候条、急下候様可申付候、為心得候、其元調、無油断之通、尤可然候、肝煎尽心候、存寄道具入かきのほせ申候、かしく、

右近

- (11) 『浅野家文書』一一三号。
- (12) (慶長五年) 八月五日付真田昌幸・同信幸・同信繁宛石田三成書状(『真田宝物館所蔵文書』『真田家文書上巻』)。
- (13) 文祿二年(一五九三)十一月二十日付浅野長政・同幸長宛豊臣秀吉判物(『浅野家文書』三二二号)。
- (14) これには浅野だけでなく、信濃国に所領をもつ東軍加担の諸大名も協力していたと考えの方が自然かもしれない。
- (15) 信幸の東軍加担については、三成も知らされていた。五日付けの書状には宛所に信幸の名も見えるものの、十日付けのものからは、その名が除外されているのが証左となる。十日にもたらされた昌幸からの書状に、信幸についても記されていたのだろう。
- (16) 『吉川家文書』一四六号。
- (17) 慶長四年(一五九九)閏三月二十一日、家康は輝元を「兄弟の如く」思い、輝元は家康に「父兄の思いを成す」とする起請文を、両者は取り交わしている(『毛利家文書』一〇六・一〇七号)。
- (18) 毛利輝元が西軍の総大将であったことは従来よりの定説だが、棒線部に「信州之儀ハ不及申、甲州迄も貴所御仕置可在之旨、輝元(毛利)をはじめ各被申候事候」とあって、これが事実であることが証明される。
- (19) 棒線部に「石玄事も、濟候へハ能候、不濟候ハ、是又其方方可被及御行候」とある。
- (20) ただしこれは、あくまで史実のような短期決戦を想定していた場合である。時間的猶予があれば、旧武田家臣であった真田は、地縁のある信濃・甲斐において、森や石川、浅野を脅かす勢力を築き上げることができたかもしれない。三成がこのことを念頭に置いていたとするならば、三成の対徳川戦略は、やはり早期決戦ではなく長期戦だったということになる。
- (21) なお、この三成書状は真田の目に触れていないが、無事に到着した八月五日付けの書状には「貴殿事、早々小室・ふかせ・川中島・すわの儀、貴殿へ被仰付候間、急度可有御仕置候、不成程御行此時に候事」とあり、三成が真田に信濃各方面への出兵を要請していることは、真田にも伝わっていた。

(22) 「森家先代実録 五」(東京大学史料編纂所架蔵謄写本)。

(23) 「森家先代実録 五」(東京大学史料編纂所架蔵謄写本)。なお、家康による森忠政を含めた諸大名への知行給与については、拙著『豊臣政権の権力構造』(吉川弘文館、二〇一六年)に詳述している。